

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \*ヴェーレに恋して\*

二宮 大輔

なぜなら、途方もなく巨大な建築物は崩壊の影をすでに地に投げかけ、廃墟としての後のありさまをもとと構想のうちに宿している、そのことを私たちは本能的に知っているのですから。

ドイツ人作家 W・G・ゼーバルトの小説『アウステルリッツ』の一節だ。自らの過去を探すためにヨーロッパを放浪するユダヤ人アウステルリッツが、ブリュッセル裁判所について考察する。曰く、丘の上にそびえたつこの裁判所のような巨大建造物を目に見ると、まともな感覚の持ち主ならず驚き、それから一抹の恐怖を感じる。その理由が、冒頭に引用した文章というわけだ。ローマ郊外で廃れた巨大集合住宅を発見するたびに、不気味さを感じつつも強烈に惹かれていった私の気持ちを、アウステルリッツの言葉は見事に解き明かしている。



【ヴェーレ】

出典元: [https://www.publicdomainpictures.net/en/view-image.php?](https://www.publicdomainpictures.net/en/view-image.php?image=117170&picture=the-sails-of-scampia)

image=117170&picture=the-sails-of-scampia

ローマに限ったことではない。もちろん、ナポリのスカンピアにもただならぬ魅力を感じた。市の北部に位置する荒廃した郊外住宅の代表格にして、ヨーロッパ随一の麻薬市場。約四万人が住むその地にそびえたつのが、「帆」の複数形を意味する「ヴェーレ」(Vele)という名の集合住宅だ。名前の通り帆のように三角形に広がるこの異様な建築物の存在に私が気付いたのは、2008年のマッテオ・ガローネ監督の映画『ゴモラ』においてだった。だが、はっきり意識しはじめたのは同作品のTVドラマ版がきっかけだ。映画版とはまったく違うストーリーのドラマ版『ゴモラ』は、カモッラ最強と謳われるサバスターノ家の趨勢をめぐる、いうなればイタリアン・ノワールの大河ドラマ。一家の跡取り息子ジェンナーロはまだ若く、後継者としての自覚が足りない。そこで父であり圧倒的なカリスマであるドン・ピエトロは、ボスとしての自覚をジェンナーロに叩き込むように、凄腕の構成員チーロに命じる。大役を仰せつかったチーロは、ジェンナーロを連れてヴェーレに向かう。ヴェーレ内の長い廊下に麻薬中毒のチンピラを追い込んだチーロは、ジェンナーロにピストルを渡し、彼を殺すように仕向ける。突然の命令に心の準備ができてないジェンナーロは、うろたえながら発砲するものの、弾は急所を外れ、チンピラの命を奪い損ねる。最後は見かねたチーロがジェンナーロの代わりに男を撃ち殺す。

後にジェンナーロが途轍もなく冷酷なボスに成長するいっぽう、チーロは組織を裏切り、ジェンナーロから命を狙われる存在となる。ドラマ版『ゴモ

ラ』初期のこの名シーンで、残酷さの象徴としてのヴェーレを、多くの視聴者が脳内にくっきりと刻み込んだ。そして私はというと、アウステルリッツが主張する「崩壊の影」と、『ゴモラ』の残酷さが絶妙に配合された建築物ヴェーレの虜になったのだった。

そんな私のもとに衝撃のニュースが舞い込んできたのは、今年の二月のことだ。レップブリカ紙のウェブサイトによると、2月20日にヴェーレ取り壊し工事が開始されたという。その記事を読んで、私は知らなかった事実をいくつも知ることとなる。ヴェーレが生まれたのは、1962年から1975年にかけて。主にナポリで活動していた建築家フランチェスコ・ディ・サルヴォが、ル・コルビュジエや丹下健三の建築スタイルにヒントを得て、郊外型の住宅地を構想したのが始まりだ。当初はAからGまでのアルファベットを冠にした計七棟の集合住宅だったが、1980年11月、南イタリアを襲い約2500人の犠牲者を出したイルピニア地震により、家を失った被災者たちがヴェーレを占拠してしまう。治安は悪化の一途をたどり、カモッラたちが抗争を繰り返す無法地帯になり下がった。なんと、十四階建てのヴェーレのエレベーターはすべて壊れて止まったままだったという。この状況を打開すべく地元民が立ち上がり、ナポリ市とカンパーニア州の支援のもと、1997年に再生プロジェクト「リスタート・スカンピア」に基づき、ヴェーレの取り壊しを始める。まずはF棟が、そして2000年にG棟、2003年にH棟が取り壊されたところで、財政難からプロジェクトはストップ。残った四棟はアルファベットではなく、赤、水色、黄、緑と名前を変えて存続することとなった。2004年にはカモッラの抗争で約120人が亡くなり、治安の悪さもピークに達するが、それでも地元民はあきらめなかった。ナポリ市長と掛け合い、最終的に地域管理施設が入る水色棟を除き、残る三棟を取り壊し、幼稚園やスポーツ施設も整備するという約束を取り付けた。こうして始まったのが、今回の緑棟取り壊しというわけだ。

プロジェクトをけん引してきたロザリオ・カルドーレは「過去を否定するわけではないが、現状は『ゴモラ』で語られているよりもずっとよくなっている」と言う。ついつい『ゴモラ』で目にしたヴェーレを想像してしまいがちだが、当局の監視も強まり、数年前

からは麻薬の密売もなりを潜めたという。カルドーレだけでなく、ドキュメンタリーを撮影する地元の映画制作会社、短編小説を出版する地元の出版社など、犯罪組織を恐れることなく、状況改善に尽力した人たちがスカンピアにはたくさんいた。彼らが口をそろえて言うのは、『ゴモラ』ではない「もうひとつの」スカンピアを知ってほしいということ。事実、スカンピアを散策すると、「私たちはゴモラではない」(Non siamo Gomorra)など、悪印象を定着させた『ゴモラ』に反発する落書きが多々見られるという。『ゴモラ』の時代を経て生まれ変わろうとしている真ただ中。それがヴェーレの現在だ。



【TVドラマ版『ゴモラ』】

出典元：<https://www.amazon.it/Gomorra-Serie-DVD-Marco-DAMore/dp/B00NNK19AC/>

好きと宣言する割に深く調べようとしなかった私自身の責任にほかならないのだが、あれよあれよと知らなかったヴェーレの素顔が見えてきた。それを認識した上で改めてスカンピア関連の本、映画、写真集などを見直してみる。そこで再確認できたのは、2006年に出版されたロベルト・サヴィアーノの著書から始まる一連の『ゴモラ』作品の存在は、やはり大きな意味を持っていたということだ。

TV ドラマ版『ゴモラ』には、まだまだ残酷なシーンが目白押しなのだが、なかでもいちばん心が締めつけられたのは、ゼッキネッタの死だった。冷酷なボスに成長したジェンナーロを取り巻く若い衆が、若きボスに反発する古株メンバーのひとりゼッキネッタを殺しに行くこのシーンは衝撃的だった。自宅の下にたどり着いた若い衆は、まだ年端も行かないゼッキネッタの息子やその友達に、銃弾を抜いた本物のピストルを渡して遊ばせる。その一方で、残りのメンバーはゼッキネッタを殺すために自宅のベルを鳴らす。スカンピアに住む小さな子供たちは常に残酷さと隣り合わせなのだが、さして怖がる様子もなく、子供らしい純粋さで、ピストルの格好良さに夢中になるのだった。ストーリーの大筋にはさほど影響のないシーンなのだが、純真無垢な子供たちが、驚くほど自然に犯罪組織へと染まっていく有様を克明に示している。これこそがスカンピアに蔓延ってきたカモツラの根源的な問題であり、原著者ロベルト・サヴィアーノが最も言いたかったことではないだろうか。

その問題をさらに凝縮したのが『ゴモラ』の続編とも言える映画『子供たちの武装団』(La paranza dei bambini)だ。「武装団」と訳したパランツァ(paranza)とは、そもそもは小型漁船のこと。真っ暗な海にライトを照らし、群がる魚を罠にかけるのがパランツァ式の漁だ。サヴィアーノは、カモツラに取り込まれていく少年たちを、偽物の光に群がる魚に見立てた。舞台こそスカンピアではないが、仲間の少年たちとナポリの一地区を制圧しようとするニコラは、その地区にのさばる悪党を排除するために、カモツラの大ボスのドン・ヴィットリオに、武器を貸してほしいと申し出る。まだあどけなさの残る少年から意外な申し出を受けたドン・ヴィットリオは拒みつつも最終的に武器を渡す。そのときのやりとりがこうだ。

**ドン・ヴィットリオ:**おまえ、何歳だ？

**ニコラ:**十五歳。

**ドン・ヴィットリオ:**どうしてサッカーの練習をしない？ いい金になるぞ。

**ニコラ:**(鼻で笑って)サッカーを上手にできたためしがないよ。

ニコラにとって、つまりナポリの貧しい暮らしを送る少年たちにとって、サッカー選手を夢見るなどもつてのほかで、銃を手に犯罪団のなかでのしあがるしか道はないのだ。ニコラを演じたフランチェスコ・ディ・ナポリはナポリのバールで働いていたところをスカウトされたという。境遇もニコラとオーバーラップする素人の青年だからこそ、気持ちをこめてこのセリフを吐き出すことができたのだろう。

スカンピアに悪印象を植えつけるという功罪も確かにあったけれど、『ゴモラ』や『子供たちの武装団』から伝わるメッセージは、計り知れないほど重く、深刻なものだ。そしてこれらの作品をとおしてスカンピアとヴェーレの存在が世界中に知れ渡ったからこそ、いま、変容を遂げることができたのだと思う。

2020年の2月20日11時17分、多くの観衆が見守るなか、クレーン車による緑棟の取り壊しが始まった。プロジェクトのスタッフであるオメロ・ベルフェナンティは、がれきの破片を一つ拾いながらこう述べた。「ここに日付を書こうと思います。今日はこの刑務所のような建物が取り壊される歴史的な日です。子供の頃の楽しい思い出とともに、覚えておこうと思います」。まさに崩壊せんとする巨大建造物ヴェーレを、淋しさにも似た複雑な感情でスカンピアの人々は見守っていた。彼らにとってヴェーレは危険な香り漂うカモツラの巣窟ではなく、生活を営んできた場所だったのだ。

さて、始まったばかりの取り壊し工事は40日間を予定していた。ご承知のとおり新型コロナウイルスの拡大により、これを書いている4月中旬現在もイタリア全土がロックダウン中で、おそらくはヴェーレの取り壊しも停止しているだろう。プロジェクトがストップしてまた犯罪組織の温床に逆戻り……などということがないように願いたい。困難な状況は続くだろうが、私の抱いていたイメージを取り払う新しいスカンピアの姿を心待ちにしたい。

<参考文献>

WG-ゼーバルト、(鈴木仁子訳)、『アウステルリッツ』、白水社、2003

(翻訳家・当館元受講生)



わたしとロダーリ⑥

## 『ペンフレンドのよもやま話』

竹田 理乃

まだ梅の花も咲いていなかった2月の下旬、留学中によく通っていたパールのご夫妻に、たまに書き送っている手紙の末尾を、いつも通りの「おふたりのことを大切に想っています (Ti voglio bene)」で括るまえに、念のため「アジアで感染症が流行っていますが、ちゃんと手を洗って書いたので心配しないでください」なんていう一文を書き足したときには、まさかイタリアをふくめた世界中がこんなことになるなんて、もちろん思ってもみませんでした。

イタリア会館に通って、コレンテをお読みになっている皆さんのなかには、深刻なニュースを2つの言語で浴びてしまって、身近な人たちよりも早く心が参ってしまった方もいらっしゃるのではないのでしょうか。観光客がいなくなってヴェネツィアの水が澄んだだとか、マンションのベランダから住人が歌い交わしているだとか、なんだか微笑ましいようなニュースが飛び込んでくるので、うっかり油断していたら、どんどん深刻さを増していく情報に押し流されてしまい、あつという間に気が滅入ってしまいました。

それは日本を愛するイタリア人の友人も同じだったようで、一斉休校で消費のあてがなくなった給食用の牛乳を使って、歴史の教科書に載っている大昔のお菓子を作る人が続出しているだとか、ほとんど知られていなかった疫病を抑える妖怪アマビエを、いろんな人が絵に描いて発表しているだとか、最初はなんとなく愉快的話をしていたはずなのに、気が付けば交換しているのはアレが怖いコレが怖いという不安をかきたてる情報ばかり。健康的ではないので、しばらくやり取りを控えることにしたくらいでした。

留学時代からずっと親しくしてきた友人と、やりとりをしていると不安を煽りあってしまうからなんて

いう理由から、うっかりすればこのまま疎遠になるかも知れないと思うとやりきれません。やりとりで一区切りがついたメールをチェックしたあと、久しぶりにイタリアで撮った写真を引っ張り出してしまいました。



【ボローニャの街角】

当時、私たちはどちらもボローニャに住んでいたのですが、知り合ったのはインターネットの掲示板でした。それぞれにイタリア語と日本語を勉強していて、彼女が出していたランゲージ・エクスチェンジ(語学の教え合い)のパートナーを募る告知に、私がメールを入れたのがきっかけだったはずですよ。お互いにシャイなので、いきなり対面で知り合っても、こんなに親しくはならなかったような気がします。

偶然同じ道を歩いていたり、同じパールでサプリメントを飲んでいたり、放課後には同じ観光地をうろうろしたりしながらも、一度も顔を合わせないままメールのやり取りだけの友だちになって、ようやく「よろしければジェラートでも」なんて誘い合っていて、人であふれかえる明るい時間帯のマッジョーレ広場で顔を合わせるまでに、おそらく2ヶ月弱くらいの時間はかかっていたはずですよ。

おっかなびつくりの顔合わせを済ませてからは、私がボローニャを去るまで、あちらこちらに連れて行ってもらったのですが、どちらもあまり写真が得意ではないので、ふたりだけで出かけたときの写真は、一枚も出てきませんでした。

語学をモノにしようと思うなら、やはり話し相手という存在は重要ですし、引っ込み思案な方は「私のはあんまり社交的じゃないから……」と、苦手意識

を出してしまうことがあるように思われます。誰でもすぐに仲よくなれる、社会的でオープンな性格の学友には、私もずいぶんと引け目を感じていました。

ですが、口で話すよりも文章を書き送りあう方がやりやすいという、私や友人のようなタイプもいます。もしも留学を考えていらっしゃるなかで、そうした不安がある場合には、ご自身の性格を改造しようとするよりも、留学先に乗り込む前に、先手を打ってランゲージ・エクステンジの相手を探しておく方が、無理がなくてオススメです。

もちろん「ネットで知り合った人と絶対に友だちになって、絶対に現地で会ってやる」なんて気負うことはありません。この友人とはたまたま上手くいきましたが、メールのやり取りの途中で音信不通になったり、なんだか反応がおかしいのでフェードアウトしたりした相手は、私にも友人にもたくさんいました。私の場合、会わずに終わったメール友だちが、少なくともボローニャだけで3人はいます。そんな細切れの文通でも、なにかの拍子にふと「あの子がこんなことを書いていたなあ」と思い出すこともあるので、得るものは必ずあるはずです。



【結局会うことのなかったペンフレンドの住むトリエステ】

たとえば今、手元にジャンニ・ロダーリの『パパの電話を待ちながら (Favole al telefono)』があるのですが、ぱっと開いてみたページにあるお話のタイトルは「オスティアの海岸で (Sulla spiaggia di Ostia)」でした。オスティアは有名な街ですし、そもそも書き出しが「ローマからごく近いところに、オスティア海岸があります」なので、そこが大都会の住人にとって最寄りのビーチで、にぎやかな

場所なのだろうなあということは、簡単にピンとくるかも知れません。ですが、たぶん夏休みでヒマを持って余っていた数週間だけ、ちょっと読み切れないような長いメールをいつも送ってくれたローマの女の子のおかげで、彼女が「いいところだよ」と言って、そこでどんな過ごし方をしたのかを語ってくれたオスティアの海辺が、私という読み手にはぐっと鮮やかに感じられます。

ちなみにロダーリの作品には、おとぎの国が登場することもあります。地図で指を差して場所を確かめることもできる、イタリア国内外に実在する場所もたくさん登場します。

子ども向けの作品を書くようになる前には、事件や経済に関する記事を書く特派員をしていたからでしょうか、彼の作品には空想と現実が当たり前のように交わる場所があって、私はそこがすごく魅力的だと思っています。

たとえば、電子書籍で簡単に入手できる『猫とともに去りぬ (Novelle fatte a macchina)』では、ローマをぶらぶらと歩いていたら出会える、古代遺跡とそこに暮らす猫たちで有名なアルジェンティーナ広場をめぐる鉄柵が、動物の世界と人間の世界を隔てるファンタジーの境界線になっていたり、のんびりしたモデナの通りに暮らしている女の子が、ふとしたことで金星の舞踏会に迷い込んだりと、地名で現実と陸続きになったおとぎ話をいくつも楽しむことができます。

行ったことのない場所に親しみを抱けるというのは、引っ込み思案な人間にとってちょっとした勇気の出どころになります。見知らない場所を紹介してくれるのは、人も本も同じこと。

ロダーリの故郷を訪ねる旅の途上、ガイドブックにも載っていないような街の観光局で「どうやってミラノに戻るつもり？」と訊かれて、最寄り駅から列車に乗ろうとしていると答えると、私が計画していたルートよりも効率がいいということで、路線の存在すら知らなかったバスを使ったルートを提案されたことがありました。計画外のことをして、大きく道に迷ってしまう可能性が怖くはありましたが、乗り換え地点として紹介された Verbania Pallanza という地名が、ロダーリの『二度生きたランベルト (C'era due volte il barone Lambert)』について調べるなかで見慣れていて Verbania - Cusio -



Ossola という地域のなかに含まれていることが分  
かると、なんとなく勇気が出て、結果的に時間とお  
金も節約できました。



【観光局の方に教えてもらったバスの止まる駅の風景】

地名を知っているというのは、人と話すのにもい  
い切り口です。私はまだマルケ州に行ったことが  
ないのですが、ジャコモ・レオパルディの詩はいく  
つか読んだことがありました。崖の上からシチリア  
の海を見晴らすタオルミーナの広場で、なんとなく  
世間話をした人に「僕はレカナティーの出身だ」と  
言われて、ぼんやりとした記憶をたどって「レオパ  
ルディもそうですよね」と答えたところ、思いがけな  
いほど楽しい会話ができたことが、今でも懐かし  
思い出されます。言語を習得しようとして躓いてい  
たころのことで、この会話を楽しめたという実感は、  
かけがえのない成功経験になりました。

海外に出れば、道を尋ねるような些細なことにも  
苦勞するものですが、そのぶん何をしても達成感  
が得られるものです。しかもイタリアは褒め上手な  
お国柄。お総菜屋さんで「これはどうやって食べる  
の？」と新しいメニューに挑戦すれば、異文化に溶  
け込もうとする心意気や好奇心を褒めてもらい、お  
客さんの少ない洋服屋をうろついていれば、気さく  
な店員さんが「それはサイズが違いますね」と世話  
を焼いてくれ、試着して更衣ブースを出てくるなり  
「やっぱり完璧に似合っていますね。思った通りで  
す」と褒めてくれるものです。なによりイタリア語で  
挨拶をただけで、まるでなにか快挙を成し遂げ  
たみたいに褒め言葉が降ってくるので、自己肯定  
感がどんどん上がって行って、性格や表情がどん  
どん明るくなっていくのが、自分でも分かりました。

すでにプロフィールどころか、性格や職の好み  
までよく知っているペンパルと顔を合わせるのにも  
四苦八苦していた私に、ささやかながらも積極性  
や社交性が備わったとすれば、この手の小さな成  
功経験の積み重ねが利いた結果なのではないで  
しょうか。

家に積みっぱなしにしていた本を少し読み進め  
たら、すっかり付き合いの長くなったペンパルに、  
いつも通りのメールを入れてみようと思います。な  
いものねだりで外に出たくなっている今、まだ行っ  
たことのない、いつかは行ってみたい場所につい  
てのよま話を重ねておけば、すべてが落ち着  
いてから新しい旅行を計画するとき、引っ込み思  
案にはいい踏み切り台になりそうですし、お互い  
が恋しくなっただけ、友人との再会が早まれば嬉  
しいですから。



【おしゃべり好きな人の多かったシチリア】

#### <登場した作品>

『パパの電話を待ちながら』 内田洋子訳 講談社  
2009年

『猫とともに去りぬ』 関口英子訳 光文社古典新訳文  
庫 2006年

『二度生きたランベルト』 白崎容子訳 平凡社 2001  
年

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>